

演題番号：6

演題名：と畜検査における牛白血病の発生状況について

発表者名：○宜保公子、川田敬子、中村正治

発表者所属：中央食肉衛生検査所

1. はじめに

と畜検査における牛白血病の診断については全国的統一基準がなく、廃棄処分名は「牛白血病」「白血病」「その他の腫瘍」など様々である。当所では平成25年以降は肉眼所見と病理組織診断でリンパ腫を確認したものを牛白血病と診断している。平成10年以降全部廃棄処分した牛のうち、現在の基準に準じて整理したところ、「牛白血病」に該当する牛は98頭(49%)で全部廃棄処分の約半数を占め、その割合は増加傾向を示した。そこで今回あらためてその摘発状況について集計したので報告する。

2. 材料及び方法

平成20年4月～平成28年10月に「牛白血病」と診断した75頭について、品種、性別、年齢、搬入農家、搬入区分の集計を行った。そのうち平成23年以降診断した50頭について肉眼および病理組織検査結果、BLV遺伝子保有状況を調査集計した。

3. 結果

平成20年以降の全と畜頭数に占める牛白血病の摘発率は0.38%で、近年の九州平均より高く増加傾向にあった。品種毎ではその他0.9%、ホルスタイン0.75%、和牛0.24%であった。好発年齢の4歳～9歳の摘発率が高く(1.04%)、特に和牛にその傾向は顕著だった。全品種で雌の摘発率が高かった(雌0.56%、雄・去勢0.11%)。搬入農家毎では再発が見られる農家から出荷される個体が半数以上(56%)を占め、新規発生農家が毎年みられた。一般畜(0.21%)にくらべ病畜(2.31%)における摘発率が高く、臨床診断名は様々であった。リンパ球増多症は必発ではなかった。

各症例の病変分布像は多彩だが、ほぼ全ての症例で心臓・消化器・リンパ節のいずれかに複数の病変が確認された。肉眼病変がみられたうち、組織学的に腫瘍性病変がみられた割合は心・消化器系・横隔膜(各100%)、臓器付属リンパ節(97%)、躯幹リンパ節(93%)、子宮(89%)の順で高く、肺(42.9%)、肝(32.5%)が低かった。肉眼所見がなく、組織学的に腫瘍性病変が確認された例もあり、特に枝肉でその傾向がみられた。50症例すべてB細胞由来リンパ腫で、パラフィン包埋組織からのBLV検出率は54%であった。

4. 考察

品種毎、性別、好発年齢についておおむね既知の報告と一致していた。性別については出荷年齢の影響と考えられた。病畜の臨床診断名は様々であり、これは牛白血病の病態の多彩さに起因し、解体後検査にあたって予断は禁物と考えられた。臓器別では、心・消化器・リンパ節(特に肺付属、内腸骨)の病変確認が牛白血病の指標となりえた。また、好発部位とはいえないものの、子宮及び横隔膜は肉眼所見によるリンパ腫の判定が容易であり病変の確認が重要と考えられた。肝・肺は組織病変との関連が低く、肉眼検査での腫瘍性病変の判定は困難であった。今後も得られた知見を蓄積し、よりの確な摘発につなげていきたい。